道生撰『妙法蓮花経疏』における「理」の概念について

菅野博史

はじめに

筆者はかつて『大般涅槃経集解』に収録されている道生（?～四三四）の経序の思想を考察した論文[1]のなかで、道生の注に頻出する「理」の概念が彼の思想の理解にとってきわめて重要であることに気づき、『注維摩詰経』の道生注、『妙法蓮花経疏』をも資料として、大雑把であるが、「理」の用法を四種に分類整理した。第一は、「事」と対照的に用いられる場合であり、「事」が具体的な事実を意味するのに対し、「理」は「事」によって表現される道理を指す用法である。第二は、「言」と対照的に用いられる用法であり、この場合は仏の教え（言葉）が真理とぴったり一致することをいう文脈では、万物の根底を貫く普遍的理法を指す（第四の用法に通じる）ときと、言葉によって表現される道理といったやや軽い意味のときの二種類があった。第三は、「～ということ」くらいに訳してよい用法である。第四は、万物の根底に存する道理、存在の真理を意味する、存在論的概念としての用法である。この第四の用法が最も重要であると考えられた。また、第四の用法の中に収めることが可能であると思うが、道生が「仏性」を「理」と同一視して解釈していることを指摘した。

このように、道生の「理」について少しく考察したことはあったが、厳密に「理」の用法を分析したわけでもなく、中

国の思想史における道生の「理」の位置づけというような大きな問題にもまったく注意が及んでいなかったことを反省せざるをえない。ところが、近年、荒牧典俊氏が「中国における仏教受容―「理」の一大変―」[2]という論文を発表された。荒牧氏は「中国古代の皇帝中心の共同体文化から中国中世の人間中心文化への『一大変』が仏教を受容することによって達成された」という基本的な視点に立ち、該論文では「このような中国文化の『一大変』を『理』概念の『一大変』によって説明してみたい」と、考察の中心を「理」の概念に置くことを述べられ、その考察のなかで「竺道生こそが、鳩摩羅什・僧肇・僧叡の哲学を『理』の哲学として体系化し、それを謝霊運がさらに中国化したとでもいうべきである」と結論づけられた。中国の思想史における道生の「理」の哲学の重要性を指摘した論文で、啓発されるところ大であった。ただし、道生の「理」の用例は膨大な数にのぼり、それらを詳細に分析する作業がまだ残されており、道生の思想を深く理解するためにも、「理」のさまざまな用法をすべて検討しなければならないであろう。その基礎作業として、本稿では、『妙法蓮花経疏』における「理」の用例を掲げ、その内容を考察する。また、付篇として、末尾に『注維摩詰経』の道生注、『大般涅槃経集解』の道生注に出る「理」のすべての用例を、今後の研究の資料として提示する。なお、付篇の『注維摩詰経』、『大般涅槃経集解』の用例に付す番号は、便宜上、『妙法蓮花経疏』の用例と通し番号とする。出典は頁・段のみを記すが、『妙法蓮花経疏』は続蔵一―二乙―二三―四所収、『注維摩詰経』は大正蔵三八巻所収、『大般涅槃経集解』は大正蔵三七巻所収である。

第一節　『妙法蓮花経疏』における「理」の用例

1　俱文義富博、事理兼邃。（三九六左下）

2　所以殊経異唱者、理豈然乎。寔由蒼生機感不一啓悟万端。（同前）

3 平等者、謂理無異趣同帰一極也。（三九七右上）
4 乗者、理運弥載代苦為義也。（同前）
5 斯則言当理愜、無昔虚偽、謂之妙耳。（同前）
6 如者、当理之言。言理相順、謂之如也。（三九七右下）
7 一時者、言雖当理、若不会時、亦為虚唱。故次明一時。（同前）
8 三乗外順、迹与理反。執文乖旨、則何能不駭一乗之唱。（三九八右上）
9 理広而脱長途之苦、為大乗也。唯菩薩能学、為之説也。（三九八右下）
10 教菩薩法、菩薩未尽理、応以教之。（同前）
11 仏所護念、仏尽理全為護、永無忘失為念。（同前）
12 夫動静唯物。聖豈然乎。窮理尽性、謂無量義定。（同前）
13 夫玄理幽淵、出乎数域之表。自非証窮深理、何由暢然欲申之也。（三九八左下）
14 文殊知理既微妙、不敢指斥詳而発言、故云我今惟忖欲説大法。（同前）
15 十者、数之満極。表如来理円無欠道無不在、故寄十也。（同前）
16 若云一乗品者、理似可一、故言方便、乃表絶歎之致矣。（三九九右下）
17 既云無方、其辞似乖理当。又須更明三乗之異、謂之種種。（三九九左上）
18 理唯一極、言符乎理、故云語無異。（同前）
19 道高理遠、孰能問者。（四〇〇右上）
20 理苟有三、聖亦可為三而出。但理中無三、唯妙一而已。（四〇〇右下）
21 見濁、五邪見本背真違理、故別立之。（四〇〇左上）

22 仏以濁世人無大志、而所以仏理幽遠、不能信之。（同前）
23 理本無言。仮言而言、謂之方便。（四〇〇左下）
24 知法常無性第一空義、明理無二極矣。（同前）
25 仏種従縁起、仏縁理生。理既無二、豈容有三。是故説一乗耳。（同前）
26 理既幽邃、難以一隅、故曲寄事像、以写遠旨。借事況理、謂之譬喩。（四〇一右上）
27 今偏授記者、明理中無小。（四〇一右下）
28 若国邑自下義況、凡七段明理。（四〇一左上）
29 説法資慧命為財、理無窮限為無量。（同前）
30 邪見住之為柱、乖理非堅為腐敗也。（四〇一左下）
31 梁棟傾危、楪在癡愛為梁棟、理易可奪為傾危。（同前）
32 身者、迹身。迹身理能提接為手、必能為力也。（四〇二右上）
33 机案、四等。理言説平若等。（同前）
34 三界流転、義如歩驟長途之苦。理能無為代歩之楽、以喩車也。（四〇二右下）
35 在実相無不通理、為四衢道。（同前）
36 理苟無三、自然与一矣。（同前）
37 各賜諸子等一大車、由索得説三是一理。理苟無三、今与其一。（四〇二左上）
38 衆宝荘厳車者、表所以大乗妙理無善而不備矣。（同前）
39 高広、理超数表為高、弥綸無極為広。（同前）
40 理妙因円、為形体姝好。（同前）

41 昔化浅昧、彼自尋乖。乖理成横而有諸苦、為忽然火起。（四〇三右上）
42 昔受化従生為子。化理在三界外。尋自乖化、還耽五欲、為遊戯。（同前）
43 造諸大車、大乗理無造作。子先不知、使其始知為造耳。（四〇三右下）
44 夫唱高必知寡、理深必信少。（同前）
45 法印、一乗妙理。理無壅滞、如王者之印無所不通矣。（同前）
46 昔受菩薩時化。化理本一。一従仏生為子。仏即父也。（四〇三左下）
47 一乗之理可以防非、為城。十方帰化、為一也。（四〇三左下～四〇四右上）
48 雖在人身作仏処、理無非法。（四〇四右上）
49 理過於言、為盈溢。（同前）
50 車者、理運無方也。（同前）
51 昔縁牽向父所止城、理為至也。（同前）
52 慈悲之念念之乖理、而子受化之後、迷淪五道、為五十年也。（同前）
53 理為法身、所処無畏、踞師子床。（四〇四右下）
54 如此諸天皆自持憍傲而皆宗事者、理伏之然也。（同前）
55 父理能伏其情、為有力勢。（同前）
56 大乗妙法、為堅執之理。理不容間、為疾也。（四〇四左上）
57 大乗執之、転功其情。理終不捨、為強牽也。（同前）
58 理不光円、為形色憔悴。内解不明、為無威徳。（四〇四左下）
59 仏理絶人、府示得接耳。（同前）

60 使聞大乗、則出入此理、無疑難也。（四〇五右上）

61 乖理為惑。惑必万殊。反則悟理。理必無二、如来道一。物乖謂三。三出物情。理則常一。（四〇五左下）

62 等注、涕無大少、四等法雨、理亦如之也。（同前）

63 以大音声、理広無量為大。無不聞知為遍。（同前）

64 理顕灼然、為唱。（同前）

65 理説既招、有教無類、莫不同来。（四〇五左下―四〇六右上）

66 不自覚知、一相之法理無異味、衆生雖同沾道沢、而莫知所以。（四〇六右上）

67 説必当理。理当、則数鍾来果、故仏為受記。（同前）

68 聖既会理、則纎爾累亡。累亡、故豈容有国土者乎。（同前）

69 此諸人所以索記者、明其内懐妙解、理応得記、故致索耳。（四〇六右下）

70 所以云仏滅度久者、遠表釈迦鑒上古猶念今日、以証今説、理名当也。（同前）

71 所以言十小劫仏法猶不現前者、明至理玄遠難可率尅。（同前）

72 所以人天交萃設供如林者、明至徳威重理感天。（同前）

73 不知光明相者、明理踰情外。（四〇六左上）

74 彼仏受沙弥請過二万劫已、明理深道遠、要須詳審、亦使物欽仰也。（四〇七右上）

75 会理則通、乖理為塞。（同前）

76 如来著説、言雖無方、理無異帰。（四〇七左上）

77 由友而来、則為友与、理固無失。（同前）

78 為楽作行。行乖大道、於理有艱、所所得之。（同前）

79 法師者、無理不通、為人能宣揚斯道、謂之法師。（四〇七左下）
80 以衣覆之、理深弥覆、衣以表之。（四〇八右上）
81 所以現塔者、証説法華理必明当。（四〇八右下）
82 夫人情昧理、不能不以神奇致信。欲因茲顕証、故現宝塔。（同前）
83 本在於空理、如塔住於空中。（四〇八左上）
84 又以衆宝荘校者、遠表極果無善而不有。於是其理従事顕然。（同前）
85 所以爾者、欲表理不可頓階、必要研麁以至精。（同前）
86 親近処者、能遠悪近理也。心既栖理、則身口無過。（四〇八左下）
87 已入於理而履行之、為行処也。雖未入理、親而近之、為親近処。（四〇九右上）
88 向明理心之徳、今弁観行之能。（同前）
89 親近処亦有始終也。不近起乱之処、為親近理。（同前）
90 此是始観、未能入理、為親近処終也。（四〇九右下）
91 仮他方者、似化理不足、故示踊出、以表斯義。（四〇九左上）
92 故三告者、以理深道妙不可軽説也。（四〇九左下）
93 解微枉惑、為飲毒薬。乖理為他。惑縁至、為薬発。（四一〇右上）
94 本化理真、為家。彼受化縁至、更還伽耶城、目之為帰也。（同前）
95 縁浅解昧、微漸近理、為遥見也。（同前）
96 六度大法不持之去、理不可亡、行之則存也。（四一〇右下）
97 言雖反常、理不乖真。雖復終日説、説而無虚妄罪也。（同前）

98 夫未見理時、必須言津。既見乎理、何用言為。其猶筌蹄以求魚菟、魚菟既獲、筌蹄何施。（四一〇左上）

99 若一聞経、頓至一生補処或無生法忍。理固無然。本苟無解、言何加乎。（同前）

100 理護十住。彼雖不仮、而在仮之位。（同前）

101 次第不越者、欲明理転深妙。悟者亦少、難可得速、示茲意也。（四一〇左下）

102 法花為理、円通無極、人能随喜。（四一一右上）

103 現六根果者、欲明其浄信。亦表罪福影響理不可差。（四一一左上）

104 明因果既竟。斯則理円事畢。（同前）

105 道既如此、明理暢黄中。理暢黄中者、寄以謦咳。然黄中之唱、言必有旨。復託以弾指。理既宣揚於□下、故云此二音声遍至十方。（同前。□は底本で判読不可能としているもの。以下同じ）

106 今明因果倶竟、理説都畢。（四一一左下）

107 摩頂而付者、以理深事大、要□□惣（惣は底本の頭注に原本不明とある）。為是義故立品耳。（同前）

108 上明因果理一、則無異趣。宗極顕然、領会有在。（同前）

109 若能領斯意者、雖在其形恒是燒、理為乖其旨。（同前）

110 聖人振初（初は底本の頭注に原本不明とある）、理不抜無根。（四一二右下）

111 観世音者、以無不通為理、無不済為懐。（同前）

112 但玄言理説妙絶群庶、致令近識受持心薄。（同前）

113 昧理望連者、慄然信至、故借呪名、以詔理説。理説無処、更成名実。（同前）

114 呪理雖一、制辞不同。（四一二左上）

115 斯則人高理遠、冥然絶群。（四一二左下）

以上のなかで、13、18、20、25、26、37、56、67、86、87、98、113には「理」が二回出、61、105には三回出るので、『妙法蓮花経疏』には都合、百三十一回の用例がある。

第二節　用例の検討

上に掲げた「理」の用例のなかで重要と思われるものを順次に考察することとするが、互いに関連する用例、共通する用例は一括して扱い、適宜分類する。

(1)「事」と「理」

用例1は、法華経という経典について、その文章、内容がともに豊かで、「事」と「理」がともに奥深いと賞賛した文章である。「事」は一般的には、具体的な事柄、事象の意であるが、ここの「事」の内容は簡潔すぎてはっきりしない。このように事と理を対にした用例は他にも見られるので、それらを参照すると、まず、26の「借事況理、謂之譬喩」が注目される。これは譬喩品の注の冒頭の部分であり、品名の「譬喩」の注である。26の私訳を示すと、「理は奥深いものである以上、物事の一面によって示すことは難しい。それゆえ詳しく事柄、形あるものに仮託して遠大な趣旨を（事柄、形あるものに）写す。事柄を借りて理を譬えることを譬喩という」となる。譬喩品では三車火宅の譬喩が説かれるわけであるから、「事」は三車火宅の譬喩の内容を構成する具体的な事象を意味することとなるであろう。このことは84の用例についても同様と考えられる。84は宝塔品の「以衆宝荘校」（『法華経』の本文には「種種宝物而荘校之」とある。大正九・三二中）の注であるが、私訳を示すと、「さらに、以衆宝荘校とは、究極の果報がすべての善を具えていることをはるか

に表す。そこでその理は事柄に従ってはっきりと現れる」となる。寿量品に説かれる「極果」がすべての善を具えているという「理」が、宝塔が多くの宝で装飾されているという「事」によってはっきりと示されることを指摘したものである。また、用例38は、宝塔品と類似した譬喩品の経文、「其車高広衆宝荘校」（大正九・一二下）の注であるが、大乗の妙理がすべての善を具えていることを指摘しており、ここと一脈通じる解釈が見られる。

このように、「事」は経典に説かれている具体的な事柄を意味し、その「事」を通して示されるものが「理」とされる。1に戻れば、「文」や「事」によって示されるものが「義」や「理」となる。104の「理円事畢」、107の「理深事大」も同様の用例である。

では、この場合の「理」はどんな意味であろうか。一般的には、道理という意味であるが、その内容は単に「事」と併記されている上記の用例だけでは、何の限定もされていないので、詳しくは分からない。ただし、84の用例では、上にその解釈を示したように、限定された内容を持っている。

（2）「言」と「理」

用例2は、仏教には多数の異なった経教が存在するが、その理由は、「理」が多数存在するからではなく、衆生の機の多様性にその理由のあることを指摘した文章である。ここでは、仏の言葉として表現された教えと「理」が対になっている。この用例では、仏の言葉が「理」に根拠を有し、「理」を言葉を通して表現するものであることは必ずしも明白ではない。「言」と「理」を併記する他の用例を参照してみよう。なお、この用例では理の唯一性を主張しているのであるが、この点は別項で考察する。

用例18は、言が理と合致しているから、「諸仏語無異」（方便品の文。大正九・六上）であるとしている。6は、「如是我聞」の「如」についての注であるが、言と理とが合致する意としている。7も、同じ文脈の用例である。

このように、「理」は「言」を通して示されるものであり、『法華経』においても当然、「理」は「言」を通して示されており、この意味で「理説」という用語が用いられる。その代表的な用例は、106「今明因果俱竟、理説都畢」である。これは、嘱累品の注であるが、如来神力品までで、一因一果を明かすことが完了し、「理」についての教説がすべて終わったことを述べたものである。その他、65、112、113に出る。

「理」は「言」によって示されるから、「理」を見ることのできない段階では、「言」が必須のものであるが、すでに「理」を見た段階では、いつまでも「言」に捕らわれてはならないことを指摘したものが、98の用例である。

ところで、言が理と合致している側面を指摘する場合のほかに、理が本来、言語表現を越えたものであることを指摘する場合もある。23の「理本無言」、49の「理過於言」の用例がそうである。23では、本来、言語表現を越えている「理」を言語を借りて表現することを「方便」の意味としている。

(3)「理」の唯一性

これまで、『法華経』に説かれる「事」や「言」を通して示される「理」の用例を提示してきたが、この「理」が道生においてどのような性格のものと規定されているかを考察する。さまざまな視点があると思うが、まずはじめに、「理」の唯一性を強調する用例が比較的多いことに気づく。3の「理無異趣、同帰一極」、18の「理唯一極」、20の「但理中無三、唯妙一而已」、24の「理無二極」、61の「理必無二、如来道一。物乖謂三。三出物情。理則常一」、66の「理無異味」がその例である。これは、『法華経』の一乗思想にも適用され、「理」が唯一であるから、その「理」に基づく教えも一乗でなければならないとする。用例25の「理既無二、豈容有三。是故説一乗耳」、36の「理苟無三、自然与一矣」、37の「理苟無三、今与其一」がその例である。したがって、用例8に「三乗外順、迹与理反」とあるように、三乗は、仏の説法の意図はともかく、外に現れたすがたとしては、「理」に反したものと批判される。

このように、「理」と一乗の対応関係に基づいて、「理」には小乗のないことを、27の「理中無小」は示している。また、逆に、38の「大乗妙理」、43の「大乗理」のように、「理」に大乗の語を付し、さらには45の「一乗妙理」、47の「一乗之理」のように、端的に一乗の語を付しているものもある。

「理」の唯一性の強調は以上の論述のとおり明らかであるが、用例16のようにこれを否定するようなものもあるので、検討を要する。これは、方便品の品名がもし一乗品であったなら、「理」が唯一であると誤解される危険性があるので、方便品と名づけて、かえって「理」を絶賛する趣旨を表すというものである。この考えは、一乗についての道生の解釈に「既無二三、一亦去矣」（四〇〇左上）とあるのと通じるものである。つまり、第二乗、第三乗が無い以上、それらと相対的な存在である一乗も消え去るというものである。道生は「理」についても、唯一という規定さえも最終的には拒絶する超越性を認めたのであろう。

（4）「理」の優越性

前項では「理」の性格のなかで最も重視されている唯一性について考察したが、道生は「理」についてさまざまな形容語を付して、その優越性を指摘している。たとえば、用例9の「理広」、29の「理無窮限」、63の「理広無量」などは、「理」の広大無辺さ、普遍性を指摘したものであり、19の「道高理遠」、26の「理既幽邃」、40の「理妙因円」、44の「理深必信少」、71の「至理玄遠」、73の「理深道遠」、92の「理深道妙」、115の「人高理遠」など、すべて「理」の奥深いこと、遠大なこと、優れたことを指摘したものである。

また、「理」が現象世界を越えたものであることは、13の「夫玄理幽淵、出乎数域之表」、39の「理超数表」に示され、凡夫の理解を越えたものであることは、73の「理踰情外」、82の「人情昧理」に示されている。

（5）仏と「理」

以上のようにさまざまに性格づけられる「理」と、修行者の主体的な関係についてはどのように考えられているであろうか。10の「菩薩未尽理」、11の「仏尽理全」を比較すると、仏こそがはじめて「理」を完全に窮め尽くすことができ、まだ仏果を実現していない菩薩は「理」を窮め尽くすことができないとされていることがわかる。このことは、68の「聖既会理」にもよく示されている。したがって、仏と「理」は密接な関係にあり、仏だけが完全に窮め尽くすことのできる「理」という意味で、「仏理」という用語が造語されることになる。用例の22の「仏理幽遠」、59の「仏理絶人」がその例である。15の「如来理円無欠、道無不在」も如来が完全な「理」を具えていることを指摘したものであろう。

また、仏が「理」を窮め尽くすということから、さらに一歩進めて、仏と「理」は一体化したものと捉えられる。用例53の「理為法身」は、「理」を法身としたものであり、25の「仏縁理生」は、仏が「理」から生じるものとしている。

菩薩は「理」を窮め尽くしていないとされるのであるが、当然、仏果を目指して「理」を窮め尽くそうと努力する過程にあるわけである。安楽行品の「行処・親近処」は、菩薩行のあり方を説いたものであるが、その注である86、87、89、90では、「理」に入って実践する段階が行処とされ、まだ「理」に入ることができず、「理」に近づく段階を親近処としている。これらの注には「入於理」「入理」「近理」「親近理」などと出る。もちろん、「入理」と言っても、完全に「理」を窮め尽くす仏の次元を意味するのではない。また、85に「理不可頓階」とあるように、「理」は頓には到達することができないことを指摘している。

このような「理」に近づく方向とは、まったく逆に迷いの方向に行くことは「乖理」という用語で表される。41の「乖理成横而有諸苦」、61の「乖理為惑。惑必万殊。反則悟理」がその例である。21の「五邪見本背真違理」も同様の例である。

むすび

『妙法蓮花経疏』に見られる「理」の用例をすべて網羅して考察を加えることはできなかったが、重要と思われる用例を、五項目に分類して考察、論評した。仏のみが完全に「理」を窮め尽くすことができること、そこからさらに、仏は「理」と一体化したものと捉えられたこと、その「理」は現象世界を越え、言語表現を越え、凡夫の理解を越えたものであるけれども、仏は「事」「言」を通して、その「理」を示そうとすること、そのように示したものが、とりもなおさず仏の経典であり、『法華経』もその一であって、当然「理」が説かれており、それを踏まえて、『法華経』の中心的教説である一因一果の法門が「理説」と呼ばれていること、「理」の優越性はさまざまに形容されているが、特に『法華経』の一乗思想との関連で、「理」の唯一性が強調されていること、などが明らかになった。他の道生の経疏における「理」についての考察は、別の機会に譲ることとしたい。付篇として、その用例集を末尾に掲げる。

注

1　拙稿「『大般涅槃経集解』における道生注」（『日本仏教文化研究論集』五、一九八五年三月）を参照。

2　『日本語・日本文化研究論集』（大阪大学文学部）四（一九八八年三月）所収。

［付篇］

［I］『注維摩詰経』における「理」の用例

116 不可思議者、凡有二種。一曰理空。非惑情所図。二曰神奇。非浅識所量。若体夫空理、則脱思議之惑。惑既脱矣、則所為難測。（三二八上）

117 若取出悪之理、則石沙衆生与夫浄土之人、等無有異。（三三八上）

118 悟夫法者、封惑永尽、髣髴亦除、妙絶三界之表、理冥無形之境。（三四三上）

119 閔疾不予、理在致傷、故託以崇法、招仏問疾也。（三四三下）

120 今日之使理帰文殊。而命余尽人者、託常遣使之儀、欲以仮顕維摩詰徳也。徳以此顕者、遣既在昔、今必高推。推若有理、則理可貴矣。苟已伏徳而藉、聞理為貴。（三四四上）

121 維摩詰迹在辯捷、為一国所憚。往有致論之理、而舎利弗曾亦示屈於彼、以為不堪。孰謂虚哉。（三四四中）

122 三十七品観是見理之懐也。以従理而見故、意可住耳。若貴観得理、即復是為観所惑、則失乎理、非所以観也。（三四五上ー中）

123 既観理得性、便応縛尽泥洹。（三四五中）

124 封著者、則乖於法理。乖違、誠出彼情。而説法者、可致闇根之嫌。又有不如法説之迹。白衣非取道之操。幸可不説捨俗之理、以傷其本也。（三四五下）

125 自此以下、大論法理也。法有二種。衆生空、法空。衆生空、法空、理誠不殊。然於惑者取悟、事有難易、故分之也。……言衆生自出著者之情、非理之然也。情従理、謂之垢也。若得見理、垢情必尽。以離垢験之、知無衆生也。（三四

六上）

126 然則法与法性、理一而名異。故言同也。（三四六下）

127 著有、則乖理遠矣。故空宜順也。（三四七上）

128 遣成無相、似有意作。意作非理、故言無作也。（同前）

129 住平等者、出家本求泥洹。泥洹為等、則住之矣。苟住等法、理無偏情、故言応次行乞食也。（三四八上）

130 更申前語也。食事雖麁、其理自妙。要当於諸法得等然後可等之矣。（三五〇上）

131 此一階使言反而理順也。苟体空内明、不以言反惑意矣。……若以無仏可見、為不見仏、無法可聞、為不聞法、則順理矣。（三五〇下）

132 順在六師之理、是悟之所由為師。又従以成出家道也。（三五一上）

133 順在若師六師理為出家者、雖三悪道、而不乖堕也。（三五一中）

134 順在解邪見理、為入也。既入其理、即為彼岸、無復彼岸之可到。（同前）

135 順在既住八難理中、心与煩悩理冥。即之為浄、無復浄之不可離也。（三五一下）

136 仏以窮理為主、言必在通。……然則四為可悪之法。無之是可楽理也。原夫五本為言、以表理之実也。（三五三下）

137 推無在之為理、是諸法之実也。実以不生不滅為義。（三五四中）

138 無所起者、無常明無本之変理在於生。（同前）

139 惑者皆以諸法、為我之有也。理既為苦、則事不従己。（同前）

140 理既不従我為空、豈有我能制之哉。則無我矣。無我、本無生死中我、非不有仏性我也。（同前）

141 除罪用術、於理既迂。（三五五下）

142 衆生心相無垢、理不得異。但見与不見為殊耳。（三五六上）

143 取我相者、不能廃己従理也。既取我相、見便転也。（三五六中）

144 善解律為理也。（三五六下）

145 世栄雖楽、難可久保。出家之理、長楽無為。豈可同年語其優劣。（三五七下）

146 正以無利無功徳、為出家理也。（同前）

147 無為是表理之法、故無実功徳利也。（同前）

148 諸長者子既以有閲、乖出家事。而聞在家有出家之理、欣然従之。（三五九上）

149 且略示其無病理也。言都無致病之本、而有楽因普会、自応有何疾耶。（三五九中）

150 以向来語、当知必如下説也。思欲是妄想之懐、致病本也。如来身従実理中来、起不由彼、応有何病耶。（三五九下～三六〇上）

151 仏為悟理之体、超越其域。応有何病耶。（三六〇上）

152 正位者、永与邪別也。然則以無無量生為正位者、無有受記。理自明也。……無無量生、原在悟理。是得者之所達。自応以正位、於内明之也。（三六〇中～下）

153 如是悟理之法、故即以明之也。理既已如、豈復有如之生滅哉。（三六一下）

154 無得者、一切衆生不得、便応亦是此得之理矣。（三六二上）

155 菩提既是無相理極之慧。言得之者、得即是菩提相也。果是其相、則非実矣。苟得非実、一切衆生亦是此之得理也。……豈応懸指有得乎所指、苟已験無、為指理自冥矣。（三六二上）

156 見謂渉理。須以教釈之焉。（三六二中）

157 応悟群生為仏義矣。既従行来、而理極於斯、故云住也。（三六五上～中）

158 夫善悪理隔、無相干之道。（三六五中）

159 向教其行施。彼既従之、理応為受。……言沙門釈子者、明己理所不応、非苟逆人善也。（三六六上）

160 入理未深、不能無楽。若無有代、必思旧楽而退矣。（三六六中）

161 魔天以不信正為本、故令信仏也。夫理本無定。苟能楽之、則為楽矣。既楽而恒、又益楽也。（三六六中）

162 既不復楽於魔宮、当復有理使楽之不耶。（三六七中）

163 施従理出、為法施也。為会謂辨具足也。（三六八上）

164 財是有限之物、施従此出、理自不得普而等也。（同前）

165 旨問法施会為大之理也。（同前）

166 又此為施、理無不周、亦無不等。（三六八中）

167 慈本所念在彼、理不得偏。不偏念者、唯欲普益也。菩提既無不等、又能実益。若以此理為懐、豈虚也哉。（三六八下）

168 将現神力、以表説理之功。功既非測、以験所説是実。（三七一中）

169 既以体理為懐。（三七一中）

170 如是者、謂前理爾也。（三七一下）

171 又凡病者、理必須侍。亦莫知其所。復何在乎。（三七二下）

172 上空是空慧空也。下空是前理空也。（同前）

173 若理果是空、何用空慧然後空耶。自有得解之空慧。此空即是慧之所為、非理然也。何可以空慧然後空者、理可不然乎哉。（三七三上）

174 向言空慧者、非謂分別作空之慧也。任理得悟者耳。若以任理為悟而得此然後空者、理可不然乎哉。（同前）

175 前推理実、為空極。（三七三中）

176 而解脱中無之者、故知諸見理必然也。（三七三下）

177 心行者、不従理為懐也。懐不従理者、纏縛生死、不相出也。（同前）

178 若不就化、永与之乖、豈得使悟有宗理乎。（三七四上）

179 魔与外道是背理之極。（同前）

180 病是形。理有必可見。而無其実、故言爾也。（同前）

181 雖已亡惑無身、終不掇理。於理不掇、必能窮之、窮理尽性、勢帰兼済。……然則厭身、出於在惑、非理中懐也。（三七五上）

182 理若無常、則以失所愛致悩。……就理為言、豈得然乎。（同前）

183 然此四句皆隨義作次、理尽兼矣。（同前）

184 苟為病切所牽、不得不推病理也。病理是無。何能牽我哉。（三七六上）

185 今推身為理、唯以四大合成、無復別法。（同前）

186 空理無病。病有空耳。就病言之、故謂空為病也。（三七七上）

187 拠患受之情、欲求無滅之者、必取其足能除患之処、以為妙極、不復希尽理也。是則証明無義、中道而止矣。（三七七中）

188 若久観理、明後生則無矣。是以言設身有苦也。（同前）

189 三界之法耳。非実理也。（三七七下）

190 以無所得理、断之也。（同前）

191 二見本以得内外法為懐。智慧観之、理無内外。然後二見、不復得内外也。（同前）

192 慧亦二種。一為観理伏心。二為於観結尽。観理伏心者、三乗所同偏執、則縛在小也。（三七八下）

193 観理伏心、必悪生死。以為化方便、造之而得耳。（三七九上）

194 理常皎然若此、而衆生乖之弥劫。菩薩既以悟之、能不示諸。（三八四中）

195 夫有煩悩、出於惑情耳。便応観察法理以遣之也。然始観之時、見理未明、心不住理。（三八六上）

196 念力而観、為造理之初。始是制悪就善者。（三八六中）

197 無住、即是無本之理也。（三八六下）

198 一切諸法莫不皆然。但為理現於顚倒、故就顚倒取之、為所明矣。（同前）

199 密欲因事暢理、以明不畏生死、故雖入而不染也。（三八七上）

200 故因事以明斯義。理亦如事也。（同前）

201 如法不如法、出惑想之情耳。非華理然也。（三八七中）

202 若体華理無好悪者、乃合律之法耳。（同前）

203 維摩詰居此室而応者、大明宗極之理也。而宗極之理無取小義。（三八八下）

204 此室常表於理。見之乃為入耳。果得入之、不復為諸垢所悩矣。（三八九上）

205 仏理常在其心。念之便至矣。（同前）

206 所以始於有身終至一切煩悩者、以明理転扶疎、至結大悟実也。（三九二上）

207 可以庇非法風雨、而障結賊之患、是舎之理也。（三九三中）

208 悦以取人、四摂理也。（三九三下）

209 又理高而扶疎、為樹之像。（同前）

210 此七既以浄好為理、而従定水中出、義為水中華焉。（三九四上）

211 財宝有七。其理無窮。富之極者也。（三九四下）

212 四以擬四方也。禅以安楽為理。床之象者也。（同前）

213 乖理為造、故三宝皆無為也。（三九八中）

214 以其向念、故教食也。亦欲因以明食之為理。（四〇一上）
215 而今云爾者、以明此飯為宣理之極、備有其義焉。（四〇三下）
216 如者、謂心与如冥、無復有不如之理。従此中来、故無不如矣。（四〇五中）
217 不尽有為、是求理不捨生死之懐、以慈悲為本、故始明之焉。（四〇六中）
218 不生無為、是窮理将入生死之懐、以満願為極、故終明之焉。（四〇九上）
219 集法薬者、使備有諸法理也。為功徳意矣。（四〇九中）
220 若以見仏為見者、此理本無。仏又不見也。不見有仏、乃為見仏耳。（四一〇上）
221 明不在迹為晦矣。然理不得在耳、非為晦也。（四一一上）
222 自此以下、明仏無相理中無之也。（四一二上）
223 是生死之理、而不実也。（四一二中）
224 若受持読誦此経、既全其理。又使日増於仏法身。（四一四中）
225 衣食供養、本以施功致福、非求理之法。（同前）
226 体此経理、終成菩提、故従中生。（四一四下）
227 実相理均、豈有深浅哉。（四一五上）
228 理無退処、従之必至。（四一五中）
229 義謂言中之理也。而此経善分別之。（四一五下）
230 明見法理、必能示諸不達。（同前）
231 説不違因縁理也。（同前）
232 三乗皆同以其理為悟、故無不摂。（四一六上）

233 雖曰総摂賢聖智慧、二乗不尽其理。唯是菩薩所行之道而已。（同前）

234 情不復乖因縁理也。（四一六下）

235 既順因縁理、則離有無諸邪見。（同前）

236 順因縁理、無復邪見者、無生法忍也。（同前）

237 不復逐語取相、而昧其理也。（同前）

238 若識以著為情、智以達理為用、終不復従識乖智也。（四一七上）

239 辨理者、為了義経也。雖曰巧辞而無理者、為不了義也。（同前）

240 人行理、無非法為法也。（同前）

〔II〕『大般涅槃経集解』における「理」の用例

241 夫真理自然、悟亦冥符。真則無差、悟豈容易。（三七七中）

242 応感之事是仏境界。示同於外、理不可請。内実常存、又何所請耶。（三九四中）

243 以理験知、非実涅槃也。（三九四下）

244 以仏所説、為証真実之理本不変也。唯従説者、得悟乃知之耳。所説之理既不可変、明知其悟亦湛然常存也。（三九五下）

245 既以如来無為為解。理無偏惑、譬之一子。生在所寄、謂之寄生也。（三九六中～下）

246 言迹既漫、理応致疑。（四〇〇下）

247 三無離理、故別之尤非。（四〇一下）

248 具倒非脩。理固然矣。（四〇四下）

249 常与無常、理本不偏。（四〇六中）
250 修常然後乃解無常、其理始是得来在我、故曰智也。（四〇七上）
251 問於寿本、是菩薩事、理非声聞所応妄予、故推之焉。（四一〇上）
252 作醍醐者、本是婦女所能。若従其受、必有成理。（四一八中）
253 法性照円、理実常存。至於応感、豈暫癈耶。（四二〇上）
254 種既断、長寿理絶。（四二八上）
255 法理湛然、有何興何没。但行之則盛、不行則衰耳。（四三九上）
256 教理未顕、故有此問也。（四四八上）
257 既翳成仏之理。又障見成之明也。（四四八中）
258 蔵者、常楽之理隠伏未発也。（四四八下）
259 理不可没。唯我能知也。（四四九中）
260 既理顕身中、亦是語知顕也。（四五二中）
261 往古諸仏説無我法。無我之理如彼木筩有外無内也。（四五三中）
262 常我之理応万行之時、義味悉在於経文矣。（四五三下）
263 仏涅槃後、尋研経教、偏執其義。於一味之理、随説成異。（同前）
264 不以取之有偏、正理遂壊。不以受身不同使真我断也。（四五四上）
265 挙近事、以譬遠理也。（四六一上）
266 覈論理衷、要従縁生、非他非自也。（四六一中）
267 然則文字語言当理者、是仏。乖則凡夫。（四六四上）

268 理無二実、而無二名。如其相有、不応設二。如其相無、二斯妄矣。（四八七上）

269 理如所談、唯一無二。方便随俗、説為二耳。（四八七中）

270 案名而言、唯在結滅、不及不滅。結滅害除、理応証知。斯則名諦。（四八九中）

271 理既不然、便応聞自是聞、不聞自是不聞也。（五一六中）

272 不聞之理遂不可聞者、躓亦大也。（五一六下）

273 尽者、結習都尽也。善性者、理妙為善、反本為性也。（五三一下）

274 得理為善、乖理為不善。（五三二中）

275 可見之相者、衆理在人、故可見也。……未能究理、何以為実也。（五三二下）

276 常無常乃至浄不浄者、実相言理。故与法不同也。人自乖之、倒於四耳。四中無倒。理之本矣。善不善者、乖理故不善。反之則成善也。若有若無若見若不見者、理隠似無。又若無可見也。若涅槃解脱及断者、乖理成縛。得理、則涅槃解脱及断也。若知不知者、理中無有不知也。若証不証者、理隠似若難明、而画然可証知也。……此七義理同、而義趣不一。（五三二下―五三三上）

277 今以譬理、結句後明也。……無物之空、理無移易、為常無也。（五三三上）

278 若仏性不可得断、便已有力用、而親在人体。理応可見。何故不見耶。（五四三中）

279 若常則不応有苦、若断則無成仏之理。如是中道観者、則見仏性也。（五四六下）

280 菟馬度河、不得河底。以況衆生無明所覆不見理也。（五四七中）

281 智解十二因縁、是因仏性也。今分為二。以理由解得従理故、成仏果。理為仏因也。解既得理、解為理因。是謂因之因也。（五四七下）

282 成仏得大涅槃、是仏性也。今亦分為二。成仏従理、而至是果也。（同前）

283　乖理為作有。皆因縁生也。無不因無不果也。（五四八上）

284　十住幾見髣髴其終也。始既無際、窮理乃覩也。（五四八下）

285　法者、理実之名也。見十二縁、始見常無常、為見法也。（五四九上）

以上の用例のなかで、152、163、159、167、184、239には「理」が二回出、122、137、155、173、174、195には三回出、120、125、181には四回出るので、『注維摩詰経』には都合、百五十二回の用例がある。また、244、274、275、277には「理」が二回出、281には五回出、276には九回出るので、『大般涅槃経集解』には都合、六十一回の用例がある。『妙法蓮花経疏』には百三十一回の用例があったので、全体で三百四十四回の「理」の用例が認められる。

（かんのひろし・文学部助教授）